

### 3 後 記

吉澤 悟

本書は、奈良県版『五条猫塚古墳』（網干善教、1962年、奈良県教育委員会）の発行からおよそ半世紀の隔たりをもって作られた。報告編の冒頭に記したように、再整理の動きは鉄製品の劣化に対処するための台帳作りに端を発する。崩壊しかけた遺物の個体・器種判別や実測・資料化のため、古墳時代の金属製品に詳しい大学院生らの助力を仰ぐことにしたが、彼らの熱意と献身によって煩瑣な作業の連続が、この総括編に掲載したような研究成果へと昇華した。本書は30～40歳代の若手研究者によって作られているが、それは遺物の資料化を進めた当時の大学生や大学院生がそのまま作業と研究を引き継いでくれた結果である。奈良国立博物館は、場所と機会を提供しただけの搾取者であることを白状しておく。

本書が「五条猫塚古墳出土品の再整理報告」ではなく、『五条猫塚古墳の研究』と題して、「報告編」「写真図版編」そして「総括編」の三部構成をとっているのは、高精度な資料化と古墳の徹底的な検討を通して、大陸・半島・列島をつなぐ技術や文化の交流の有り様を追う「研究」を標榜したからに他ならない。奈良県教育委員会による発掘報告の存在に大いに感謝しつつ、半世紀の間に深化した考古学的知見を盛り込み、先達の偉業に恥じない「研究」とするにはそれなりの気概と努力が欠かせない。メンバー各自が力を惜しまず結果を出したことは、遺物の種類ごとに「報告編」と「総括編」を通覧して頂ければ納得されることと思う。

本研究の要点や意義については、第11章の総括および解題に既にかかれていたため繰り返さない。あえて本研究の「面白さ」について補足（蛇足）しておくならば、およそ「渡来系」と括られる技術や文化とはどんなものか、その実態を探る楽しみに満ちていることといえよう。

「渡来系」という言葉には、大陸や半島から人やモノが直接移動してくることを指す場合や、作り方の伝習、あるいは形状・技術の模倣、さらにはそのセカンドコピーの生産など様々なレベルが含まれると考えられる。蒙古鉢形の眉庇付冑は、まさに大陸文化の象徴的遺物とされがちだが、技術的にはむしろ国産の流れの中にあり、大陸的なデザインの単発的な採用と説明され得た。帯金具は大陸からの輸入品をコピー生産する流れの中に位置づけられた。一方、鉄鍬には半島から輸入されたと考えられるものと国産のもの二系列がみられるという。五条猫塚古墳という「渡来系」のデパートは実に多様な品揃えである。

またこれを営む集団は、大和王権の喉元にあたる紀の川流域に拠点をもっていた。輸入と模造、伝統技術の保持、遠隔輸送など様々なニーズに応えたいたたかな人々の姿がそこに想像されよう。本研究では遺物の細部をみつめることから「渡来系」の多様性を描き出すことができた。これを面白いと感じるのは私だけではないと思う。

### 3 後記(吉澤)

ところで、本書は予算の関係上、「写真図版編」を2013年(平成25年)、「報告編」を2014年(平成26年)、「総括編」を2015年(平成27年)と、3ヶ年に分けて印刷することになった。各編の奥付は印刷した年をそのまま表記したが、この3冊を揃えて初めて世に問うことにしたため、本書総体の発行日は2015年(平成27年)12月28日となる。引用・参照する際には不都合も多いかと思われるが、ご寛容いただければ幸いである。

五條猫塚古墳の遺物は、毎年少しずつではあるが、保存処理を継続的におこなっている。錆塊の除去やクリーニング、接合等によってここで報告した状態から変化を遂げる遺物もあるだろう。報告編の作成中にも蒙古鉢形眉庇付冑の保存処理が進められたが、それによって新たに得られた知見も大きかったといえる。そのほかの遺物についても、今後も継続するであろうそうした作業の中から新たな発見や予察事項の確認がなされると期待できる。

また、そうして「新たな」姿を我々にみせてくれた蒙古鉢形眉庇付冑をはじめとする多くの遺物は、韓国国立慶州博物館で開催された「日本の古墳文化」展(会期:2015年12月22日～2016年2月21日)や滋賀県立安土城考古博物館で開催された「倭五王海を渡る」展(会期:2015年10月17日～11月29日)で展示されるなど、早くも大いに活用されており、今後もますますそうした役割が期待されている。現状での遺物の状況を記録し伝えるという資料化の成果が本書であるが、それにより、これまで知られていなかった多くの資料についても改めて公にすることができた。本書の刊行により今後新たに展示活用が求められる資料も出てくるものと思われる。

本書のような「研究」としての成果とともに、より一般向けの展示・活用、そしてそれらの両者を満たしうる半恒常的な保管・管理環境の構築など、本書の刊行後にこそ要請される仕事は多い。あるいは、比較事例の増加や理化学的分析の発展などによって、改めて五條猫塚古墳出土遺物を見直す機運が生じるかもしれない。本書は五條猫塚古墳の「決定版」を目指したものではあるが、現物も取り巻く状況も今に留まることはない。半世紀後にはさらなる更新が求められて良いと思う。むしろそうであることを願い、この研究の締め括りとしたい。

# 五條猫塚古墳の研究

## 総括編

発行年月日 2015（平成 27）年 12 月 28 日

発 行 奈良国立博物館  
〒 630-8213 奈良市登大路町 50 番地  
TEL 0742-22-7771

印 刷 株式会社 天理時報社  
〒 632-0083 天理市稲葉町 80 番地